

小林秀雄著『本居宣長』:四十五章主題《『祝詞考』等で、眞淵が「無理な解」をするのは、「天上の国(神代)」とは不合理であると言ふ考へから、脱却出来ない爲》その「關係論」的纏め。

②#古学④#神代⑯人の上⑰人代⇒からの關係:⑯の②は、[④といふも名の異なるのみにて、同じく⑯なるべき]事、といふ考へに貫かれてゐた。この考への裡で、⇒[⑯:天地古今の本意]⇒彼の⑯の考へ(⑯的考へ?)が熟したと確信した時、これを、[⑰を盡て、④をうかがふ]といふ言ひ方で言つた⇒⑯眞淵。

①言辭(古書の註釋/#古言の語釋)の道②#上つ代③事物④#具體性或は個性⇒からの關係:①を探る⑤の眼には、終始、何の曇りもなかつたと見ていい。#訓詁の長い道を徹底的に辿つてみた、⑥の何一つ貯へぬ #心眼に、②の③の #あつたがままの④が、鮮明に映じて來た⇒⑤宣長。

②#上つ代③事物④#具體性或は個性⑤#言語⇒からの關係:#心眼に直觀される、②の③の意味合なり價値なりが、そのまま承認できない理由など、⑥には、何處にも見當りはしなかつた⇒[⑤:#言語]⇒それが、⑦の場合となると、⑦の眼前で、⑤は、[あつたがままの④]まで裸になつて見せなかつた⇒⑥宣長⑦#眞淵。

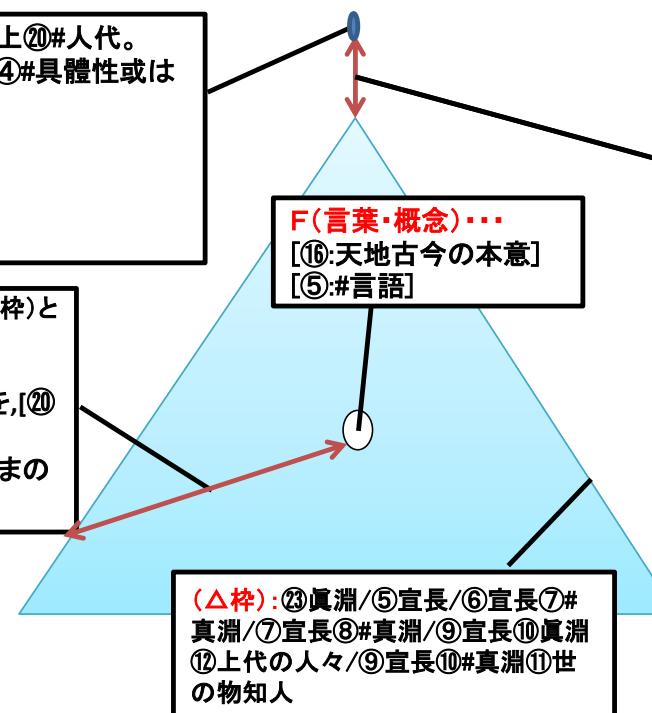
④#古事記⑤古事記 #神代⇒からの關係:⑧は、④の訓詁の仕事には、遂に手を付けなかつた。⑧が遺したのは、⑤の假名書に過ぎなかつたが、⑦は借覽して、その訓讀(假名書)を讀んだだけでもし⑧が④の #訓詁の仕事に、本氣に這入つて行つたら、どういふ事[#古言のふりの語釋不足]になつたかを、⑦は看破してゐた⇒⑦宣長⑧#眞淵。

②眞淵著[祝詞考]③下心⑤言葉⑥古言⇒からの關係:②にも、[自己流解釋]があるのを、⑨は暴露してゐる。何故⑩は無理な解を考へ出して誤るのか。⑨は、③あつての事と見る。⑫の間で取交はされた⑤が、⑥に鋭敏な⑩に、何故、素直に信られなかつたか⇒⑨宣長⑩眞淵⑫上代の人々。

②#祝詞考⑦#天上の国(神代)⇒からの關係:②註釋文にも、⑩の[#無理な解]があるのは、⑨に言はせれば、⑪が泥(なず)んでゐる、⑦とは不合理であると言ふ考へから、脱却出来ずにあるからだ。無理な解で、讀めば讀める、となれば、不合理は餘程緩和されると。それにしても、⑥を前にして、何といふ曖昧な態度だらう⇒⑨宣長⑩#眞淵⑪世の物知人。

(物:場 C')…②#古学④#神代⑯天地古今の本意⑯人の上⑰人代。  
①言辭(古書の註釋/#古言の語釋)の道②#上つ代③事物④#具體性或は個性。  
②#上つ代③事物④#具體性或は個性⑤#言語。  
④#古事記⑤古事記 #神代。  
②眞淵著[祝詞考]③下心⑤言葉⑥古言。  
②#祝詞考⑦#天上の国。

E: [F(言葉・概念)との附き合ひ方・用法]…「So called」「Fと(△枠)との距離獲得」(Eの至大化)。  
~~~~~  
\*「彼の⑯の考へ(⑯的考へ?)が熟したと確信した時、これを、[⑰を盡て、④をうかがふ]といふ言ひ方で言つた」。  
\*「それが、⑦の場合となると、⑦の眼前で、⑤は、[あつたがままの④]まで裸になつて見せなかつた」。



#### からの關係(D1の至大化)

\*「⑯の②は、[④といふも名の異なるのみにて、同じく⑯なるべき]事、といふ考へに貫かれてゐた。この考への裡で」。  
\*「①を探る⑤の眼には、終始、何の曇りもなかつたと見ていい。#訓詁の長い道を徹底的に辿つてみた、⑥の何一つ貯へぬ #心眼に、②の③の #あつたがままの④が、鮮明に映じて來た」。  
\*「#心眼に直觀される、②の③の意味合なり價値なりが、そのまま承認できない理由など、⑥には、何處にも見當りはしなかつた」。

\*「⑧は、④の訓詁の仕事には、遂に手を付けなかつた。⑧が遺したのは、⑤の假名書に過ぎなかつたが、⑦は借覽して、その訓讀(假名書)を讀んだだけでもし⑧が④の #訓詁の仕事に、本氣に這入つて行つたら、どういふ事[#古言のふりの語釋不足]になつたかを、⑦は看破してゐた」。  
\*「②にも、[自己流解釋]があるのを、⑨は暴露してゐる。何故⑩は無理な解を考へ出して誤るのか。⑨は、③あつての事と見る。⑫の間で取交はされた⑤が、⑥に鋭敏な⑩に、何故、素直に信られなかつたか」。  
\*「②註釋文にも、⑩の[#無理な解]があるのは、⑨に言はせれば、⑪が泥(なず)んでゐる、⑦とは不合理であると言ふ考へから、脱却出来ずにあるからだ。無理な解で、讀めば讀める、となれば、不合理は餘程緩和されると。それにしても、⑥を前にして、何といふ曖昧な態度だらう」。